

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02700

研究課題名(和文) インドネシア客家語『客語陸豊方言』の文法体系研究 台湾海陸客家語との比較から

研究課題名(英文) Grammatical Features of Indonesian Lufeng Hakka in Het Loeh-foeng-dialect

研究代表者

遠藤 雅裕 (Endo, Masahiro)

中央大学・法学部・教授

研究者番号：10297103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の対象はSchaank, Simon Hartwich. 1897. Het Loeh-foeng-dialectにオランダ語で記述されている100余年前のインドネシア・西カリマンタン州サンバス県で使用されていた陸豊客家語である。

本研究の成果は以下の2点である。(1)本書に記録されている客家語の単語・例文について、オランダ語・英語・同系統の現代台湾海陸客家語・標準中国語を対照させ、また文法項目のラベルを付したデータベースを作成したこと、(2)代詞・介詞(格標記)・量詞(類別詞)・補語・アスペクト標識・形容詞述語文・比較文等について、海陸客家語と比較分析を行ったことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、歴史資料がすくない海陸片客家語について、その空白を埋めるものである。梅県客家語などが属する粤台片客家語についてはバーゼル資料など、その歴史資料は豊富であり、文法もふくめて重要な研究成果が発表されている。一方、これと隣接する海陸片に属する客家語(陸豊・海陸・陸河客家語等)の通時的側面の研究は、資料が少ないためにほぼなされていない。よって、本研究は客家語の発展の研究に寄与するのみならず、中国語史全体にも寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：The subject of this research is Lufeng Hakka, which used in Kalimantan Indonesia 100 years ago, described in Schaank, Simon Hartwich. 1897. Het Loeh-foeng-dialect. The results of this research are the following two points. (1) Concerning Hakka words and example sentences recorded in this book, we have constructed a database including grammatical feature labels and Dutch, English, modern Taiwanese Hailu Hakka and Mandarin Chinese translations. (2) We conducted a comparative analysis of pronouns, pronouns (case markers), classifiers, complements, aspect markers, adjective predicate sentences, comparative sentences, etc. through Taiwanese Hailu Hakka.

研究分野：中国語学

キーワード：客家語 ヨーロッパ資料

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究対象である Schaank, Simon Hartwich. 1897. *Het Loeh-foeng-dialect* (以下《陸豊方言》と略称)は、100 余年前のインドネシア・ボルネオ島(西カリマンタン州サンバス県)で使用されていた陸豊客家語を、オランダ領東インドの官吏であったシモン・スハーク(Simon. H. Schaank)がオランダ語で記述したものである。この言語は、18 世紀中葉以降、中国南部よりこの地に入植した客家人によってもたらされた。書名にある「Loeh-foeng(陸豊)」とは彼らの故地である広東省海陸豊地区にある陸豊のことである。彼らの入植時期や故地は、台湾の海陸客家人のそれと並行しており、インドネシア陸豊客家語(以降「陸豊客家語」と略称)は故地の客家語とはもちろん、申請者が長期にわたって研究している台湾海陸客家語ともきわめて近い関係にある言語といえる。現在、海陸豊地区は陸豊市・海豊県・陸河県という行政単位で構成されている。そしてこの地区の言語は、《中国語言地図集 第2版》によれば「客家話海陸片」に区分されており、インドネシア陸豊客家語と台湾の海陸客家語もこれに含まれることになる。

《陸豊方言》は19 世紀末の出版であるが、使用言語がオランダ語であったためか、あるいは漢語方言研究が現在ほど発展していなかったためか、長い間正面から研究されることはなかった。この記述資料の重要性に、おそらく最初に注目したのは橋本萬太郎氏である。橋本氏の依頼により、英語版が Lindauer 氏の訳で *The Lu-feng dialect of Hakka* として1979 年に出版されている。英訳版の公刊によって、《陸豊方言》はアプローチしやすくなったのであるが、その後もここに記述されているインドネシア陸豊客家語そのものについての研究は進展していない。

《陸豊方言》が研究されるようになったのはほぼ2000 年代からであり、主として台湾でその音韻体系を中心に少なからぬ論考が発表されている。たとえば、盧彦傑(2006) 記録一種客家話:《LOEH-FOENG-DIALECT》(客語陸豊方言)的語言特色(《語文學報》13:235-250)、呂嵩雁(2007)《客語《陸豊方言》語言演變研究》(私家版)、呂嵩雁(2010)客家話的一口氣:《陸豊方言》為例(《臺灣客家語文研究輯刊》1:1-24)などである。また、梁心俞(2007)《印尼西加地區海陸客語接觸研究》(輔仁大學語言學研究所碩士論文)は《陸豊方言》をベースに現代の西カリマンタンの客家語を調査したもので、文法についての分析も行われている。これらの研究はいずれも大きな価値があるが、《陸豊方言》の文法面の分析は進展したとはいえない。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパ資料による中国語研究の一環という位置づけである。ヨーロッパ資料や日本統治期の台湾における記述資料等については、梅県客家語や台湾四県客家語を含む粵台片客家語にくらべて、海陸片客家語の歴史資料はかぎられている。そのため、本研究は海陸片客家語の歴史研究について、史的データを整備し提供することを第一の目的とする。具体的には《陸豊方言》に記述されているインドネシア陸豊客家語の例文の整理およびその電子テキスト化をおこない、また同書の単語・フレーズ・文を整理し、同系の台湾海陸客家語文法との比較をおこなうことである。

さらに、これによって得られたデータをもとに、《陸豊方言》に見られる形態的・統語的・意味的特徴が当該言語独自のものか、客家語全体や隣接する諸言語(粵語・閩語等)に共通するものかを通時的・共時的に検討し、統語的側面から客家語を含む南方漢語の形成について明らかにすることを第二の目的とする。

3. 研究の方法

本研究では《陸豊方言》の記述の整理・分析と、現代海陸客家語による翻訳を行う。
《陸豊方言》の書誌情報は以下の通りである。

【オランダ語原版】(台湾で出版された影印本)

Schaank, Simon Hartwich. 1897. *Het Loeh-foeng-dialect*. Leiden: E. J. Brill.

【英語版】

Lindauer, Bennett M. 訳. 1979. *The Lu-feng dialect of Hakka* (文字と言語 研究資料5) 特定研究「言語生活を充実発展させるための教育に関する基礎的研究」文字と言語班。

原版《陸豊方言》は全226 ページ、6 章からなる。内容は、第1 章が序文・音韻体系、第2 章が数詞・代詞・常用例文、第3 章が場面別会話、第4 章が語彙集、第5 章が同音字表、第6 章がほかの方言との比較となっている。本研究では第2 章から第5 章にかけて記述されている語・文・フレーズ等を主たる対象にしている。これらはいずれも左側にオランダ語、右側にローマ字表記の陸豊客家語という構成になっている。また内容の理解については、英語版を援用している。なお、英語版には客家語の入力ミスや英訳の欠如のほか、収録例文・単語について、原版と一致しない箇所が複数箇所見られた。

海陸客家語については、詹智川氏に調査協力を依頼した。詹氏は1939 年、現在の台湾新竹県新埔鎮の生まれであり、第一言語は海陸客家語である。また1945 年の国民党政府による台湾接收以降、標準中国語も習得している。本研究の現地調査では、陸豊客家語の例文が海陸客家語でそのまま通用するか、通用しない場合はどのようにいにかえることが可能かについて、面接形式で確認した。

本研究でとった具体的な研究手順は以下の通りである。

- (1) データベース作成：1300 ほどの文・フレーズ・単語について、ローマ字表記/漢字表記(同書収録の同音字表準拠)陸豊客家語・オランダ語訳・英語訳(Lindauer 訳 1979)・海陸客家語訳・標準中国語訳・原版と英語版の出典情報を付した電子データベースを、Excel をもちいて作成。このほか、通時的考察のために、20 世紀中葉の台湾海陸客家語を反映している王涓臺(1962)《新客話課本》1～2(漢字版・ローマ字版、新竹：天主教華語學院)も電子テキスト化した。
- (2) 統語的特徴等による分類：各例文等に統語的特徴等に基づいてラベルをつける。ラベルは以下の通りである：単文/複文・肯定文/否定文/疑問文等・動詞述語文/形容詞述語文/名詞述語文等・使役/受身/処置/比較/二重目的語文等・〔補語〕結果/方向/可能/状態/数量等・〔アスペクト〕完了/既然/経験/持続/習慣/重行(再試行)等・〔モダリティ〕可能・願望・義務・実現等。
- (3) 例文の分析：主として、代詞(人称・指示・疑問)・名詞・動詞・前置詞・名詞接辞(指小辞)ならびに動補構造・アスペクト・モダリティ・処置文・比較文等を中心に、粵台片客家語・閩南語・粵語やショオ語等の関連する言語も参照しつつ分析をおこなった。

4. 研究成果

- (1) 原版《陸豊方言》ならびに英語版をもとに、陸豊客家語・オランダ語・英語・現代海陸客家語・華語の対照である単語・例文のデータベースを作成した。
- (2) 関連文献として、海陸客家語テキストである王涓臺(1962)《新客話課本》1～2(漢字版・ローマ字版、新竹：天主教華語學院)を電子テキスト化した。
- (3) 文法については、主として以下の5つの点が明らかとなった。
 1. 代詞・介詞(格標記)・量詞(類別詞)・補語・アスペクト標識・形容詞述語文・疑問文・処置文・比較文・語順について、整理をおこない、海陸客家語とは以下の点がことなっていることを確認した。すなわち、(1)指示代詞は漢諸語に広く見られる2語体系ではなく3語体系であること、(2)奪格・処格・向格標識をかねる介詞 ta3 の存在、(3)量詞の構造助詞的機能、(4)状態補語標識の欠如、(5)非完了相標識として動詞後置成分「緊」を使用すること、(6)形容詞述語文ではコピュラ「係」の出現頻度が高いこと、(7)目的語前置文や再述代名詞の使用で処置があらわされること、(8)「過」字比較文の使用頻度が高いこと等である。
 2. 副詞「再過」(ふたたび)は、本来「再 tsai21」(ふたたび) + 「過 ko21」(過ぎる)というフレーズであったが、これが融合して海陸客家語では一語になっている。さらに、海陸客家語では変調や促音化(tsak32 ko35)などの形式的変化をともなっているが、陸豊客家語では本来の字音をたもっていることが明らかになった。
 3. アスペクトについては、陳前瑞(2008)《漢語體貌研究的類型學視野》の4層体系を基準として整理をおこない、非完了相標識の「緊」が内容語的意味特徴(固定する)を保持していること(海陸客家語の標識「等」は機能語としての意味のみである)、標準中国語の「在」に相当する進行相標識が存在しないことから、現代海陸客家語の体系と相異があることを確認した。そのほか、以下の点が明らかになった。すなわち、(1)海陸客家語では達成型事態をあらわす動詞(句)(たとえば「死」)についても非完了相標識「等」を用いることができるが、同様の傾向が陸豊客家語の「緊」にもあること、(2)アスペクト標識「識」は経験相をあらわすという点で海陸客家語と共通しているが、さらに粵語にみられるような可能をあらわす機能があること、(3)再試行相標識「過」については、閩語をのぞく南方漢語と共有する特徴であること等である。
 4. 未実現モダリティ標識「會」については、海陸客家語と同様、可能性義・可能性義・未然義をもっていること、また海陸客家語の方が未然をあらわす文ではより義務的に用いられることが明らかとなった。具体的には、陸豊客家語の「你(あなた)+打(なぐる)+渠(彼)+無(疑問文文末詞)」という諾否疑問文に対して、海陸客家語は「你(あなた)+會/有+打(なぐる)+渠(彼)+無(疑問文文末詞)」のように、未然(會)または已然(有)の標識が必要となる。その他の現象も考慮すると、特に未然を有標形式で言語化する傾向があるといえる。
 5. 指小辞「tsii5」(仔)が存在するが、これに類似する用例が《新客話課本》にも「子 ze」として用いられている。このため、新竹県湖口の高陸客家語を調査したが、その存在は確認できなかった。これは、19世紀から20世紀前半には海陸片客家語に一般的であったが、その後現在の指小辞に見られる中舌母音に弱化したと考えられる。
- (4) 以上の成果は「インドネシア客家語『客語陸豊方言』の文法体系研究—台湾海陸客家語との比較から—」と題した冊子の報告書として50部を出版した。なお、ローマ字表記/漢字表記陸豊客家語・オランダ語・英語・海陸客家語・標準中国語対照の一覧表については、英語訳を割愛した、理由は翻訳者である Bennett M. Lindauer 氏に許可をいただくことができなかったためである(勤務先とおぼしき米国の大学に書簡を送ったが宛先不明で返送されてきた)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 遠藤雅裕	4. 巻 40
2. 論文標題 Het Loeh-foeng-dialect (陸豊方言) 所記録的印尼陸豊客語語法特點	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中央大学論集	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤雅裕	4. 巻 10
2. 論文標題 論臺灣海陸客語的情態標記「會」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LANGUAGE AND LINGUISTICS IN OCEANIA	6. 最初と最後の頁 44-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤雅裕	4. 巻 上
2. 論文標題 臺灣海陸客語「識」字的語法化 - 從動詞演變為體標記 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集	6. 最初と最後の頁 427-443
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤雅裕	4. 巻 11-2
2. 論文標題 臺灣海陸客語處置式的主語特性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 臺灣語文研究	6. 最初と最後の頁 169-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤雅裕	4. 巻 42
2. 論文標題 臺灣海陸客家語の比較文 - および南方漢語の「過」字比較文について -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 30-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 遠藤雅裕
2. 発表標題 論南方漢語的重行體「過」 - 以海陸客語為中心 -
3. 学会等名 國際中國語言學學會第26屆年會 (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤雅裕
2. 発表標題 論臺灣海陸客語“再次”義「過」的語法化
3. 学会等名 第十二屆台灣語言及其教學國際學術研討會 (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤雅裕
2. 発表標題 臺灣海陸客語的情態標記「會」
3. 学会等名 國際中國語言學學會 (IACL-25) (國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 發表者名 遠藤雅裕
2. 發表標題 Schaank(1897)所記錄的印尼陸豐客語語法特點 - 與臺灣海陸客語的對比 -
3. 学会等名 第 8 回漢語方言研究会
4. 發表年 2017年

1. 發表者名 遠藤雅裕
2. 發表標題 論南方漢語的重行體「過」 - 以海陸客語為中心 -
3. 学会等名 第 9 回漢語方言研究会
4. 發表年 2017年

1. 發表者名 遠藤雅裕
2. 發表標題 論臺灣海陸客語“再次”義「過」的語法化
3. 学会等名 第10回漢語方言研究会
4. 發表年 2018年

1. 發表者名 遠藤雅裕
2. 發表標題 臺灣海陸客語「識」字的語法化 - 從動詞演變為體標記 - 」
3. 学会等名 國際中國語言學學會（國際学会）
4. 發表年 2016年

1. 発表者名 遠藤雅裕
2. 発表標題 臺灣海陸客語的情態標記「會」
3. 学会等名 第6回漢語方言研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----